



トセパン協同組合アドバイザー ～アルバロさんを偲んで～

トセパン協同組合（以下、トセパン）で40年に渡ってアドバイザーを務め、トセパンを導いてきたアルバロ・アギラル・アヨンさんが、心臓発作のため67歳で亡くなったという知らせが届いたのは、9月8日（メキシコでは9月7日の夜）だった。これまでさまざまなプロジェクトを立ち上げ、組合員たちと共に歩んできたアルバロさんが逝ってしまった。しかも、こんな突然に…。知らせを聞いた私は、あまりの驚きに、しばらく信じる事が出来なかった。

アルバロさんが成し遂げてきた仕事を振り返る

トセパンは、メキシコでも最も規模の大きな先住民の協同組合の一つで、アグロフォレストリーを始めとするその地域づくりは、今やモデルケースとしてメキシコの国策に取り入れられている。トセパンのこうした成長において、アルバロさんが果たしてきた役割はとても大きい。

彼はトセパンにおけるさまざまな活動に関わっていたが、その中でも大きな功績と言えるのは、アグロフォレストリーによるコーヒー等の栽培と、マイクロクレジットと呼ばれる組合独自の金融機関「トセパン・トミン（ナワット語で、みんなのお金、を意味する）」の設立だった。これらは組合の多様な活動の中で特に重要な取り組みで、「トセパン・トミン」における組合員たちへの住宅建設支援（融資）プロジェクトは、アルバロさんなくして成し得なかったことだった。実際、このプロジェクトは高く評価され、「ヨーロッパ・マイクロファイナンス・アワード2017」も受賞している。

滞在期間の多くをアテンドさせてもらい、アルバロさんと過ごす中でさらに彼のことが好きになった。

九州各地を回る時はほとんど車で移動したが、車窓から見える山を見ながら、「日本にはこんなに森があるなんて、メキシコとは全然違う」と驚いていた。

トセパンのある地域でも、（トセパンに所属していない人たちが）作物栽培や開発のために森を切り開いているところも見られる。メキシコ全体で言えば、森林資源の搾取は大きな問題だ。その現実があるため、アルバロさんは日本の山のある風景の美しさがとても印象に残ったと言っていた。

日本の林業の実情も知り、「これだけの豊かな森があるのは素晴らしいこと。だから、ぜひ守ってほしい」と話していた。そして、「トセパンも同じように森を守り続けていけるように、また世界中で環境を守ろうとしている人たちをサポートするために、自分たちの現状を日本の人たちに知ってもらいたい。そして、アグロフォレストリーで育てられたフェアトレードコーヒーを日

私がアルバロさんに初めて会ったのは、2001年。代表の中村と一緒に、ウインドファームとして初めてトセパンを訪問した時だった。滞在中、トセパンの主要設立メンバーであるドン・ルイスさんと共に、アルバロさんもコーヒー生産に関わる現場や女性の活動などを一緒に回り、丁寧に説明してくれた。その頃はまだ組合の活動も限られており、エコツアーや「トセパン・トミン」といった現在見られるような活動は始まっていなかった。

その次に会ったのは、翌年にウインドファームがエクアドルで開催した有機コーヒー国際会議の場だった。アルバロさんは奥さんのロサリーナさん、アグロフォレストリーの専門家のパトリシアさんと共に参加し、トセパンの取り組みについて講演してくれた。その後もインタグコーヒーの生産地を訪問するなどして一緒に過ごしたが、いつも、トセパンに持ち帰って応用できそうなアイデアを探したり、インタグの皆さんにアドバイスしたりと、穏やかでやわらかい物腰ながら、アルバロさんの熱い思いを感じることができた。

そして予定をすべて終え、帰国

アルバロさんが日本で伝えてくれた事

また、陽気でダンスを踊るのが好きというメキシコ人のイメージとは異なり、周りで踊っている人がいても絶対に踊らないと言われていたアルバロさんが、エクアドルの会議の後の親睦会で照れながら踊っていて皆を驚かせた。真面目で冷静というだけではなく、とても愛嬌のある人柄だということをエクアドルでの旅で知ることができた。

2005年、パトリシアさんと共にアグロフォレストリーツアーと題して日本各地で講演を行うため、アルバロさんは初めて来日した。私は、

本の皆さんに選んでほしい」と静かに訴えていた。

来日する数年前に、ウインドファームを通してトセパンのコーヒーが日本で販売され始めていたが、そのことに対するアルバロさんの日本の人たちへの深い感謝の思いも、旅の中のさまざまな場面で感じ取れた。

アルバロさんは思慮深く、静かだが強い信念を持っていた。冷静にしっかりと考えや思いを伝えてくれ、一見すると厳格そうに見えたが、とても優しい人だった。メキシコ



来日時のスナップ 右から：アルバロさん、岩見、パトリシアさん



ヨーロッパ・マイクロファイナンス・アワードの賞状を手にするアルバロさん



金融機関のトセパン・トミン

で最初にアルバロさんに会った時にはそういう印象だったが、エクアドルや日本で一緒に過ごす中で、彼はとても愛嬌があり、愛情深い人だということを感じることができた。

トセパンの取り組みに一生をかけたその理由

アルバロさんは、トセパンがあるプエブラ州ではなく、ナジャリット州の出身だった。トセパンが設立されて3年後の1980年、農村支援プログラムの農業技師としてこの地域に來た時、初めてトセパンを訪問した。

アルバロさんはよく「1年だけいるつもりが、いつの間にかずっといることになってしまった」と笑いながら言っていたが、トセパンの設立メンバーと共に、組合員が置かれてきた不当な状況や貧困・社会問題に対し、長年に渡って先頭に立って闘ってきた。けれど、決して自分を前に出す人ではなかった。だから、自分だけが注目されるのを好まなかったのだと思う。褒められたり、お礼を言われたりするのが苦手で、私

がお礼を言うと、決まって「お礼は言わなくていい」という返事が返ってきた。

組合は、あくまで地元の先住民族の組合員たちの組織であり、自分分はアドバイザー。お金のために彼らと働いているわけでもなかった。皆が幸せに生きる“というトセパンの目標を自身の生き方として捉え、彼らが大切にする”連帯・団結“の思いに共感したからこそ、人生の大半をこの地で過ごしたのだと思う。そして、どんな困難な状況でもいつも冷静で、家族やトセパンの人たちと笑顔で過ごす日常の幸せを大切にしていた。だからこそ、先住民の組合であるトセパンにおいて、これほど皆に愛され、信頼されたのだと思う。



伝わってきた。

アルバロさんが紡いでくれたトセパンと日本のつながり

日本から遠く離れたトセパンとやり取りする上で、正直に言えば、簡単に進まないこともある。そんな中でも、アルバロさんに相談すればスムーズに進められる、彼がいてくれれば大丈夫。トセパンの皆さんだけでなく、日本にいる私たちにとっても、彼の存在はとても大きなものだった。

トセパンに行くと、いつもそこにアルバロさんがいた。おとし訪問した際にも、事前にお願ひしておいたインタビュのアレンジをすべてしておいてくれ、忙しい中、自宅に招いてくれたり、時折顔を見せては「すべて問題なくいっているか。困ったことはないか」といつも気にかけてくれた。

私がクエツァランの中心地へ行くうとする時は、小さな町にもかかわらず、まるで父親のように心配していた。今でも、そうしたアルバロさんの笑顔と、やさしく語りかけてくれ

アルバロさん亡き後、改めて知ったその苦難の道

私は、アルバロさんが亡くなってから、トセパンの皆からの彼への言葉を通して、彼がどれほど大変な思いをしながら、組合の人たちと厳しい状況を乗り越えてきたのか改めて知ることになった。それは、私たちには自分の辛さや大変さを全く見せなかったからだ。

聞けば、アルバロさんがトセパンへ来てからの数年、トセパンの発展に伴って自分たちの権力が失われていくのを感じ始めていた地元の権力者たちは、アルバロさんを買収し、この土地から追い出そうと

していたという。けれど、トセパンの人たちを信じ、共に闘っていくという強い決意があつたアルバロさんは、買収などには応じなかった。その姿を見て、トセパンの創始者、ドン・ルイスさんはこう言ったそう。だ。「人を惑わすのはお金。そして、その誘惑はとても強い。けれどアルバロとローシー（アルバロの奥さん）にとって、大切なことはお金なんかじゃなかった。彼ら

る声がはっきりと思い出される。それほど彼の存在は、私にとって当たり前のことだった。トセパンの人たちにとっては、尚更そうだと思う。トセパンにしっかりと根を張り、組合の人たち皆を大きく包み、見守ってきた父親のようなアルバロさんを失った彼らの辛さは、計り知れない。けれど、彼らの中にはアルバロさんから学び、受け継いだものがしっかりとある。

アルバロさんのお葬式で、トセパンの代表パウリーナさんは組合の皆にこう呼び掛けた。「アルバロが言っていたユートピア（誰もが幸せに暮らせる世界）を作るため、前を見てこれからも皆で一緒に進んでいこう！」と。私は、彼らが大切にしてきたこの団結と連帯こそが、アルバロさんを失い、コロナ禍で経済的にも困難なこの状況を、彼らが乗り越えていく大きな力になると信じている。

次にトセパンを訪問するとき、私は本当にアルバロさんがもうこの世にはいないのだということを実感するのだろう。いつも気にかけてくれた彼がもう現れることはない。けれど、私も彼から教わったこと、そし



トセパンの創始者、ドン・ルイスさん

は根っからの協同組合員なのだ」と。

そうやって、ずっと組合の人たちに寄り添い続けたアルバロさんは、しかし、それによって、この地域で大きな力を持っていたコーヒーの仲介業者や保守派の人たち、また近年は鉱山開発会社などから批判や憎悪の対象となり、脅迫を受けたことも度々あったという。

そして、トセパンが発展し、コミュニティの問題を少しずつ解決するようになると、「アルバロはトセパンを利用して職を得ようとしてい

てその連帯の思いを胸に、これまでと変わらずトセパンの皆と歩み続けていきたいと思う。

「アルバロ、本当にありがとう。あなたと出会えたことに、心から感謝しています。」

（取材・ウインドファームスタッフ
岩見 知代子）



エクアドルの国際会議の後で
右から：パトリシアさん、岩見、ロサリーナさん、アルバロさん